



学生の地域観に関する考察

～「学生の地域活動応援プロジェクト」における 参与観察によって～

小川弘法

これまで私の問題意識は「都市住民の農村観がどのようなことであるか」という事であった。このことは、都市住民がどのように農村を捉えているのかについて、彼らが農村地域で期待するライフスタイルを考察し農村の位置づけ・存在を考えることであった。

本稿では都市住民の中で学生に限定して地域社会では若者層が少なくても、地域の担い手になる可能性を検討した。修士論文で取り上げた「学生と地域をつなげる絆づくり事業」を事例として参与観察の手法により学生の地域観の変化を論じた。

この事業を通して、学生が地域に関わる機会を作ることで、学生は地域の事情を考え、地域活動に対する視野が広がっている。学生の中には地域社会では若者層が少なくても、地域の担い手になる可能性があるということが分かった。つまり、あまり地域の問題を意識しないで友達同士で気軽に地域活動に参加した学生の意識が、地域活動を知り、活動者と対話し、短時間でも一緒に活動することで、地域に継続的に関わることの重要性に気づき、地域活動を自分の事として考えられるように変化した。そして学生は主体的により発展した新たな活動をしていく。こういった継続的な関わりを作っていくため、学生と地域住民が互いにそれぞれの条件や立場を理解しながら地域で必要な地域活動することが重要である。さらにこの活動を継続されるためには社会福祉協議会などの地域団体や学生 OB などの経験者のサポートが必要である。

**キーワード：学生の地域活動 主体的な活動 継続的な活動 地域のサポート
地域観の変化**

はじめに

これまで私の問題意識は「都市住民の農村観がどのようなことであるか」という事であった。このことは、都市住民がどのように農村を捉えているのかについて、彼らが農村地域で期待するライフスタイルを考察し農村の位置づけ・存在を考えることであった。

都市住民の中で学生に限定して検討してみると地域活性化の取り組みとして、学生が農村地域で交流する事例がいくつも報告されている。すでに地域で活動中の学生団体はある。しかしながら修士論文の事例研究で取り上げた「学生と地域をつなげる絆づくり」事業の実施母体である広島県民

ボランティア活動推進会議の会員からは「学生が行うと地域での活動が一回で終わるのではないか」「学生はドタキャンが多いと聞く」「学生がお客さん気分地域に来て、地域も学生をもてなすようでは地域の実情は分からない」などの発言あり、学生に地域の担い手として期待している部分と学生が地域で活動する事に疑心暗鬼な部分があるのではないかと思われる。このような発言の根底には学生が継続的に関わることや学生に責任をもって関わってほしいとの思いがあるのではないかと思われる。これらに対して学生が地域活動を知り、活動者と対話し、短時間でも一緒に活動するだけでも意味があるのではないかと思われる。

本稿では学生と地域をつなげる絆づくり事業を事例にして参与観察の手法により学生の地域観の変化を論じてみたい。学生は地域に短時間関わるだけでも地域への見方は変わるのではないかと思われる。1年間関わる中で学生の意識の変化や地域に関わろうとする学生について考察したい。

1 学生と地域をつなげる絆づくり

1.1 事業母体

学生と地域をつなげる絆づくり事業の事業母体は広島県民ボランティア活動推進会議（Vハートひろしま）である。このVハートひろしまは1996年11月に設立された。設立の背景には、県内各地のボランティアの交流と情報交換を目的に開催していた交流会の参加者が1000人規模になった事、企業や労働組合の社会貢献活動が盛んになった事、阪神淡路大震災の経験を踏まえ有事に備えたネットワークが必要だった事などがあげられている¹⁾。団体の目的はボランティアのためのボランティアによるネットワークづくりであり、「県内の活動者が、ボランティア活動の楽しさを語りあったり、いろいろな活動情報を交換し合うなかで、地域や世代、分野を超えて、ボランティア活動についてのさまざまな発見、交流できるゆるやかなネットワーク²⁾」である。主な活動は交流をキーワードに①交流活動、②広報活動、③提言活動の3つを柱としている。例えば交流活動は県内3ブロック別にボランティア交流会を隔年開催している。この交流会はブロックごと取り組みに違いがあり実行委員会を組織し、会員が主体的に取り組んでいるブロックもあれば、事務局が主導し交流会を行うブロックもある。会員は市町のボランティア連絡協議会をはじめ、県内企業、県内公益団体などの団体で構成されている。加盟団体数は1998年には65団体だったが、市町村合併により市町のボランティア連絡協議会が統合したこともあり2012年5月現在33団体である。Vハートひろしまが抱えている問題として県域のネットワークであるが会員が主体的につくりあげる活動はできていない。加えて活動者の固定化と高齢化していることである。

1.2 取組みの契機

学生が同事業に関わるきっかけは2010年9月に広島で開催された「全国ボランティアフェスティバルひろしま」である。学生が複数ある分科会の1つを企画することになった。私は指導教員の勧めでそこに参加することになった。学生は十数回の会議を重ねて分科会を運営した。その学生メンバーは同フェスティバル終了後も打上げや親睦会を行っていた。2011年2月に同フェスティバル事

1) 同協議会設立趣意書より

2) 同協議会リーフレットより

事務局から「同フェスティバルに関わった学生企画の総括をしたい」との連絡がきた。そこでの議論を経て事務局からは広島県ボランティアセンターとして2011年度、同フェスティバルのつながりを活かして学生が中心で企画を立ち上げたいとの打診があった。そして2011年4月から「学生と地域をつなげる絆づくり事業」が動き出した。

1.3 取り組みの体制

広島県ボランティアセンターが事務局であるVハートひろしまが事業母体となって「学生と地域をつなげる絆づくり事業」が行われることになった。事務局が運営委員会の役割を果たすチーフ・サブアドバイザー会議に事業を提案し、委員が協議し、活動資金を共同募金へ申請し、その後全体会議で承認された。その意図はフェスティバルを機に、若い世代、特に学生の活動を県域のボランティア連絡協議会であるVハートひろしまが応援するためである。同事業を行う事でVハートひろしまが抱えている問題として会員が主体的に取り組む活動が少なく、加えて活動者の高齢化していることを解決していこうとした。さらに学生側の問題として学生の在学期間は限られており継続的に活動しにくいことなどがあげられる。この事業を通して学生が主体的に企画し、活動を若い力で県内の発信していくことで学生と既存の活動者が一緒に活動を行い多世代、幅広し分野の活動者の交流を図る。さらに県内のボランティア活動・市民活動の推進のネットワークを図ることをねらいとした。これをまとめたものが図1である。

事業の体制はVハートひろしまが活動資金を確保し、学生が活動内容を決定するという役割である。Vハートひろしまの呼びかけに応じた学生が中心となって事業をすすめていく形である。そのため学生はVハートひろしまの会員ではない。本来ならばVハートひろしまの会員が企画・実施することが当然であるが、若い人の発想を取り入れていくと言うコンセプトのため、直接会員が企画するのではなく事業チームを学生対象に募集してそこに任せる形である。この事業チームは企画会議を重ねていく中で、名称を「学生の地域活動応援プロジェクト実行委員会」とした。

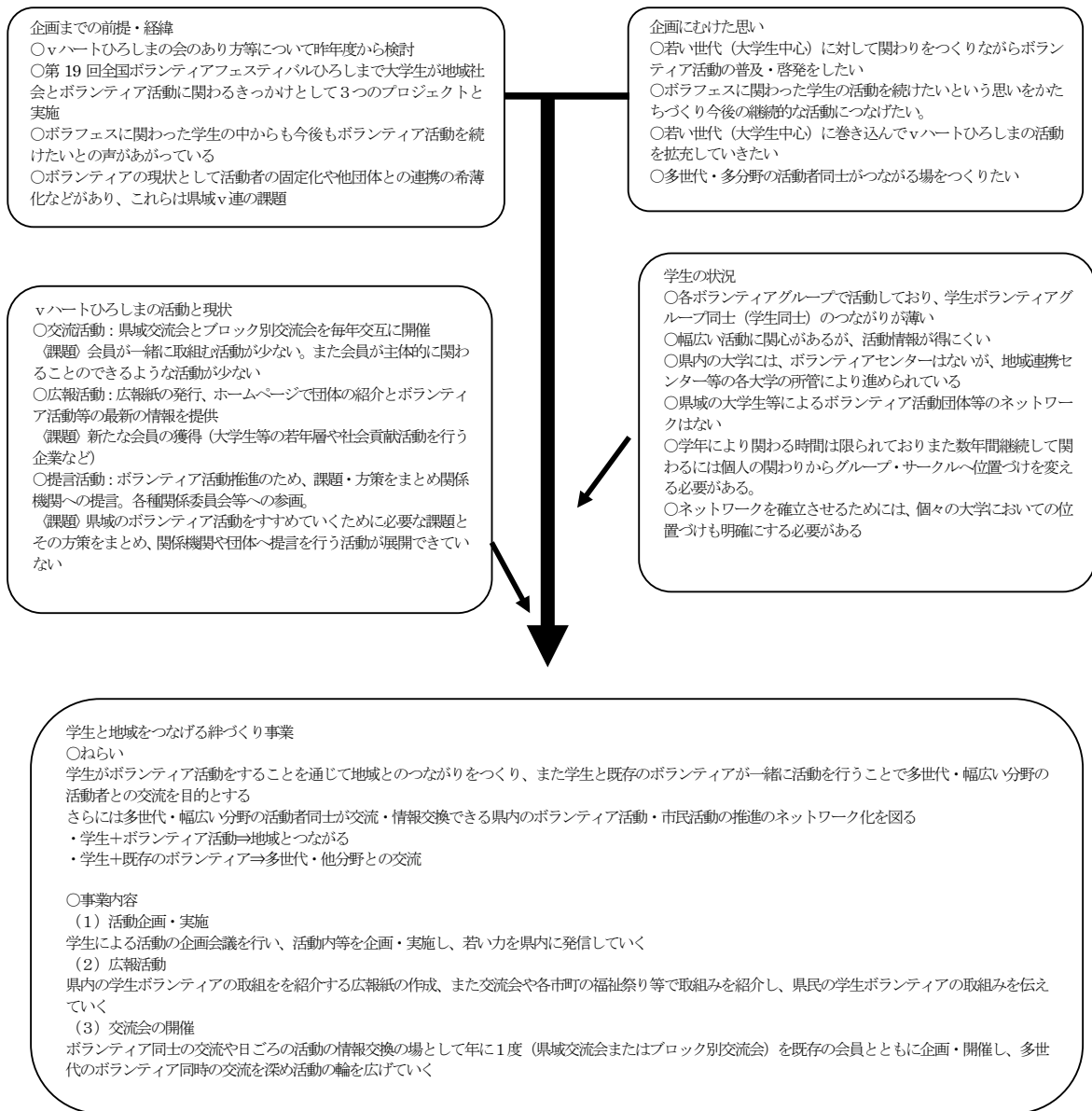
1.4 学生の地域活動応援プロジェクトの活動内容

Vハートひろしまの呼びかけに応じた8人の学生が2011年4月から企画会議をもった。ここでプロジェクトの方針が2つ固まった。

1つ目は地域視察から活動を掘り起し活動につなげていく事である。すなわちメンバーから「地域で学生に求められている事が分からない」「地域課題が分からない」などの意見がでた。それらを出発点にメンバーは学生自身が地域視察を行い、そこで見つけた課題を解決するための地域活動を行うという企画を考えた。具体的には上半期に地域視察する企画を体験プログラムとし、下半期に地域での企画を活動プログラムとした。体験プログラムは2回の実施を計画した。2回の体験プログラム終了後、9月に方針を修正して体験プログラムをもう1回計画し、活動プログラムは軽い位置づけになる。なぜならば、体験プログラムの参加者数が多くなかったこと、学生がボランティア活動に裂ける時間が少ない状況が見えてきたからである。表1は1年の動きである。体験プログラム（ひろしま留学ツアー）3回、中間報告会、活動報告会、活動の発展として活動プログラム2回（五サー市、廿日市市吉和）と大きくは7回の活動を行った。

2つ目はボランティア活動を前面に出さないことである。すなわち学生に対して呼びかけを行う時に「ボランティア活動をあまり意識しない」気軽さも大切との意見もあり前面にボランティア活

図1 「学生と地域をつなげる絆づくり事業」にむけた取組



vハートひろしま全体会議配布資料より

表1 1年間の流れ

日程	活動	内容
8月22,23日(月・火)	ひろしま留学ツアー田舎に泊まる	安芸太田町で実施。山間地の日々の暮らしに触れる。住民と夕食を兼ねて交流。一泊二日
9月7,8日(水・木)	ひろしま留学ツアー まちをしゃべろう	三原市、尾道市で実施。広島県立大学生とのグループワーク。市街地の取り組みを知る。一泊二日
10月29日(土)	ひろしま留学ツアーミニ報告会(中間報告)	留学ツアー参加者の交流。vハートひろしまへ経過報告。意見交換
11月12日(土)	五サー市	安芸太田町の祭り。ひろしま留学ツアーの紹介。地元ボランティアの手伝い
12月4日(日)	ひろしま留学ツアー 島へ行こう	江田島市で実施。気軽に参加できるプラン。昼食はボランティアと交流。日帰り
1月28日(土)	廿日市市吉和	障がいのある子どもとの交流活動
2月26日(日)	活動報告会	1年間の取組みを報告

動とはアナウンスせず取組んでいく方向で進めることになった。募集要項やチラシなどにボランティアの表記をできるだけしなかった。

1.5 体験プログラム

まず体験プログラムの概要を述べる。体験プログラムは学生を募集する段階で名称を「ひろしま留学ツアー」として進めた。これは先ほど述べたボランティアを前面に出さない方針を踏まえている。このツアーの目的は学生と地域をつなぐことである。地域選定については広島県の地域を3つに区分し、広島県内の中山間地域に位置する安芸太田町（田舎編）、島嶼部である江田島市（島編）、そして過疎地域を有する地方都市である三原市、尾道市（まち編）を選び、山・島・街を網羅しなおかつ今後の継続的な活動を考えて広島駅から車で移動時間が1時間半程度のエリアである。それぞれ特色をいかしたツアーを企画した。それをまとめたのが表2である。

表2 体験プログラム

ツアープラン※	田舎に泊まろう（田舎編）	まちをしゃべろう（まち編）	島に行こう（島編）
場所	安芸太田町	三原市 尾道市	江田島市
日程	8月22,23日（月・火）一泊二日	9月7,8日（水・木）一泊二日	12月4日（日）日帰り
趣旨	安芸太田町での住民の暮らしぶりにふれ、日ごろから地域活動に取り組んでいるグループや団体などとの交流活動を通して、中山間地域の生活の課題などについて知るとともに自分自身がこれから実際の活動ができるかを考えます。	三原市や尾道市で日ごろから地域活動に取り組んでいるグループ、団体の取り組みについて学ぶとともに、市街地の生活の課題などを知り、自分自身がどんな活動に継続して参画できるかを考えます。また、既に地域活動をしている学生と交流、情報交換することで、学生活動者同士のつながりをつくります	学生が地域活動を始めるきっかけとして、江田島市で日ごろから地域活動に取り組んでいるグループや地域住民のみなさんと交流することで、島での生活について知るとともに、自分自身が地域でどんな活動ができるかについて考えます。
参加人数	3大学9人	5大学13人	4大学2専門1高等専修29人
実行委員数	5人（+事務局2人）	6人（+事務局2人）	8人（+事務局2人）
フィールドワーク（f w）	5コース ・お茶の間交流会（平見谷サロン） ・田んぼがたくさんある秘密（農業） ・まちぶらり（商業） ・子どもあつたかふれあい（子育て） ・困りごと助け隊（支え合い活動）	3コース ・活動を知ろう（尾道v連の会合参加） ・商店街に出よう（常設サロン見学、荒神堂サロン） ・坂の町を歩こう（坂を途中にある休憩所、自治会中心のサロン。南人子さんとこ）	4コース ・笑顔が増える小さなサポート（支え合い活動） ・島をキレイにし隊（海岸清掃） ・クリスマスパーティー@旧宮ノ原小学校サロン（サロン） ・江田島ぐるっと一周（自治会の取組みと島の視察）
特色、ポイント	・日常の生活に触れる。 ・住民との交流の中から学生発の地域活動を考える。 ・住民と夕食を兼ねて交流。 ・山間地域での高齢化や過疎化を学生自身が感じる。	・県立広島大学生との交流。 ・既に行われている活動を知り、話を聞く中で学生の関わられる事を考える。 ・町の概要等ではなく、安芸太田と比べると気軽さを重視。	・日帰りツアー ・f wは体を動かす体験も。 ・住民とバーベキュー。 ・安芸太田、三原・尾道を踏まえての企画。
参加費	4500円	4500円	1500円

※ツアープランの表記は以下カッコ内表記。田舎に泊まろうは（田舎編）。まちをしゃべろうは（まち編）。島に行こうは（島編）

1.5.1 ひろしま留学ツアーの内容

次に表2の趣旨を踏まえ、各ツアーの内容について述べる。大きな柱として、知る（市町の概要、社協の事業等の説明）、フィールドワーク（子育て支援、サロン・海岸清掃などの自治会活動、農業）、活動者と交流（住民と夕食準備、学生ボランティア部とグループワーク）、グループワークの4点を意識してプログラムは検討され、計画された。

この4つの柱をどのツアーでも行い、3回の留学ツアーとも大きな流れは同じである。要約すると以下のようなものである。広島駅集合解散で貸切バスによる移動で、行きの車中では参加者同士自己紹介し、ツアー概要の説明などを行った。ツアー先では、ボランティア活動者の話を聞き、小グループに分かれてフィールドワークを行った。それを踏まえて数人のグループで気づきを出し、学生が地域で関われる事を考えた。フィールドワークは県内社会福祉協議会（社協）で行われている「ふ

れあいいきサロン³⁾」と「オール広島ささえあいネット⁴⁾」などを取り入れた内容になった。次に各ツアーについて述べる。

1.5.2 田舎編

まず「田舎編」の取組みを述べると、安芸太田町の研修・宿泊施設で安芸太田町社会福祉協議会職員から町の概要、観光資源、社協の事業内容をクイズ形式で学んだ。その後町の取り組みとして人間と猛獣(クマ)の関係から環境保護についての話と安芸太田町に移住した人が企画した町内一周約88kmを走破する「しわいマラソン」の話聞く。そして郷土料理の角寿司と鮎の塩焼きを住民と一緒に準備し、2日目のフィールドワークの関係者などを囲んで交流会兼夕食会とした。1日目の最後は参加者全員でふりかえりの時間を持った。2日目の午前中、5グループに分かれてフィールドワークを行った。具体的には商店主から話を聞くことや子育てサークルの活動などできるだけ日頃の住民の生活が垣間見える活動である。午後からグループワークを行った。グループワークの前半はフィールドワークを中心に話し、後半は中山間地域の問題に対して学生ができる地域活動を議論した。

1.5.3 まち編

続いて「まち編」の取組みは次の通りである。1日目、三原駅前の三原市ボランティア・市民活動サポートセンターで「人にやさしい祭り実行委員会」の取り組みを聞き、それに関わっている県立広島大学ボランティア部の学生とグループワークを行った。その後、三原のまちづくりに関わる「みはらまちづくり兎っ兎」と障がい者福祉に関わる「ちゃんくす」を視察した。その後ホテルに場所を移し参加者は1日目の感想を共有した。2日目、尾道に移動して午前中3グループに分かれてフィールドワークを行った。フィールドワーク先は「田舎編」より気軽な立場で学生は活動を視察する姿勢である。例えば地域活動している団体の連絡協議会の会合に同席して話を聞くなどである。午後からはグループワークを行い、各グループがフィールドワーク先で学生が取組める地域活動を議論した。両市とも市町村合併で広域になったがいずれの活動も旧三原市、旧尾道市の取り組みが中心である。

1.5.4 島編

最後に「島編」の取組みを述べる。日帰りのために行きの移動時間を有効に利用して江田島市の概要やフィールドワークの内容を紹介した。4グループでフィールドワークを行った。フィールドワークの特徴は学生が住民と一緒に海岸清掃や住民宅で草取りなどをし、一度に多くの人手が必要な活動であった。昼食は住民とバーベキューで交流を図った。午後からグループワークで、フィールドワークのふりかえりとこれからの学生ができる活動を考えた。1日で先ほど提示した4つ柱を行

3) 地域の中でご近所さん同士が集い、楽しみ、その中で日ごろの楽しみや感動を分かちあい、ちょっとした生活の中での困りごとを相談しあう、地域の中のお茶の間の場のような場の総称 (<http://www.hiroshima-fukushi.net/03regional/02salon.html>)

4) 暮らしの中のちょっとした困りごとを住民同士がお互いさまの気持ちでささえあう、住民による有償の日常生活支援のしくみ。有償の活動から、日常的に継続してささえあえる活動につなげていくことを目的している。 (<http://www.hiroshima-fukushi.net/03regional/04support.html>)

うためタイトなスケジュールになった。

1.5.5 参加者

各ツアーの定員はバス1台で移動できる25人とした。それに実行委員が加わり30人前後を想定した。「田舎編」「まち編」の要項は長期休暇前に事務局から県内大学へ送付した。いくつかの大学で案内の掲示を確認したが定員からすると半数程度の参加にとどまった。ツアー参加者を表3にまとめた。人数を確保するために実行委員の誘いで参加した学生も多い。したがって実行委員の所属大学からの参加が大半である。学年についても大学3、4年あるいは大学院生が多く参加した。参加者の中には参加動機を「専攻しているコースに関連している」「地域活動している」など問題意識や目的意識がしっかりしている学生もいた。田舎編終了後、ツアー参加者が友達を誘い「まち編」に一緒に参加するケースもあった。

一方で「島編」については「田舎編」「まち編」と同様に事務局から要項を各大学に送った。締め切り直前に多くの申込みがあり30人弱であった。気軽に友達同士で参加した学生が多く、「田舎編」「まち編」と比べて学年は1、2年が多い。

フィールドワークやグループワークについては、「田舎編」では2～3人で各人の考えをじっくり聞けた。「まち編」「島編」では1グループ4～6人で個別にじっくり話を聞くというよりは受け身の姿勢の学生もいた。また実行委員に加わらないかとの声かけに「田舎編」「まち編」に参加した学生は実行委員会に顔を出したり、委員になったりした。一方で「島編」は「田舎編」「島編」に比べて少ない。参加者の中には大学の近くのアパートなどに下宿している。普段、学生は住み慣れた地域というよりは学業のために一時的に住んでいる地域である。そのため学生が日頃から地域を維持するための活動に参加する事は少ないと思われる。

表3 ツアー参加者

ツアー名	学部等	男	女	
田舎に泊まろう	3大学 7学部 研究科	3	6	院生 大学3, 4年
まちをしゃべろう	5大学 7学部 研究科	9	4	院生 大学3, 4年
島に行こう	4大学2 専門1 高専修 11学部	13	16	ほぼ大学1, 2年生

1.6 プロジェクトの報告

プロジェクトの報告会を9月と2月に2回行った。9月は留学ツアーの取り組みを中心にミニ報告会と題して、2月は1年間の取り組みと今後学生の地域活動を広げていくことを目的として活動報告会を行った。留学ツアー参加者等には日程が決まった段階で大まかな内容をメール等で案内したが、ツアー参加者は両会とも数人の参加にとどまった。

1.6.1 ミニ報告会

ミニ報告会は「田舎編」「まち編」に参加した学生が交流できる場、ツアーのグループワークで考えた企画をより具体化する場、加えて次期ツアーの紹介する場として企画した。しかしツアー参加者が数人しか参加しないという事態になった。そしてパネリストもはじめ承諾していた学生が辞

退するなどが生じ、本事業の中間報告の位置づけにとどまってしまった。参加者は18人（内実行委員8人）である。

内容については、前半は実行委員会の概要と留学ツアーの内容、グループワークで出た意見の紹介である。後半はツアーに参加した学生3人と実行委員（コーディネーター）でツアー参加の動機から自分自身のこれからの地域活動までをパネルディスカッション形式で話し合った。その後参加者全員で意見交換を行った。

ここではVハートひろしまの運営委員から「会員が高齢化している」「日常を見に来てほしい」「次世代になげてほしい」「自立した組織になってほしい」など地域の現状、学生に対しての期待が出された。学生は「学生はボランティアを義務づけられている」「大学のサークルが知られていないようだ」「学生だけでは不十分なので地域の協力は必要」など発言した。それに対し運営委員は「自然にお互い様の活動してもらいたい」など学生は地域活動を積極的に関わる意識の部分がもっとほしいと発言し、事務局や社協職員からは「学生が地域に目を向けることも大切」など学生が地域の現状を見ることからスタートとの認識や「学生が行っている地域活動を地域に十分には伝えられていない」など学生と地域をキーワードとしてそれぞれの立場から意見が出された。これらの意見を踏まえて参加者で今後の事業の方向を考えることは時間が限られている事もありできなかった。

1.6.2 活動報告会

活動報告会では1年間の活動内容の報告と学生、地域、大学がつながることで地域活動を進めていくポイントを考えて。前半は基調報告として1年間の取り組みを伝え、後半は「学生の地域活動を上げていくために」と題してパネルディスカッションを行った。パネリストは「田舎編」・「まち編」・「五サー市」に参加した学生、ぬくぬくネットワーク安芸太田（安芸太田町ボランティア連絡協議会）会長、広島女学院大学ボランティアセンター担当職員の3人である。コーディネーターは実行委員である。また自由参加の交流会を設定し、はじめ15分ほど自己紹介の意味を込めてレクリエーションを行い、その後歓談とした。参加者はツアーで関わった市町の社協職員、フィールドワークの受入団体、ツアー参加の学生など29人（内実行委員9人）である。ミニ報告会より一步踏み込んだ「学生の地域活動をし易くする環境づくり」まで提示できた。

パネルディスカッションの中でぬくぬくネットワーク安芸太田会長は「受け入れ前は学生との交流は少なく不安と期待があった。学生イコール無反応なイメージで、これまでは授業の一環だから仕方なく参加しているような印象を持っていた。受け入れ後の変化としては、学生は積極的に目的意識を持って参加し地域の声によく耳を傾けて、学生自身の思いや考えを聞けてうれしかった。想像以上に楽しい時間だった。五サー市でツアー報告の冊子配布はよかった。継続的な活動を期待したい」との発言あり、さらに学生の地域活動を広げるために「忙しい中で活動している学生の状況を理解してみんなにメリットがある雰囲気や受入体制が必要」と発言した。また大学職員は「今の学生は1にバイト、2に学業、3にボランティアである。学生は地域活動の経験も少なく気軽に参加できる場をいかに提供していくかが問題。地域は人手不足を理由に学生を呼ぶのではなく、企画段階から学生に参加させてほしい。学生たちが達成感を持てるような活動であれば積極的にやる」と述べ、さらに活動を広げるために「交通費などの学生の負担軽減と学生がとにかく楽しく参加できる環境を地域と学校でつくりたい。学生にはとにかく体験してほしい」と発言した。本事業は企画段階から地域に関わるプログラムを目指し、学生が気軽に参加できる部分と主体的に関わる部分

の2点がある事で地域に対して学生の力を発揮できる事業であると思われる。この部分を地域住民が評価している部分だと思われる。しかし学生はボランティアの優先順位が低く、交通費など負担を考えると、地域視察を活かした新たな地域活動を企画する事はできなかったように継続性については地域の期待に十分応えられなかった。

1.7 活動の発展

体験プログラムを経て、2回活動プログラムが行えた。1つ目は11月に安芸太田町で行われた五サー市である。2つ目は廿日市市吉和で子どもと触れ合う活動である。2つの活動とも事務局から留学ツアーに参加した学生に参加を呼びかけ、それに応えた学生が参加した。留学ツアーを通して学生は地域に行くために交通手段が必要だと言うことが分かり、事務局が予め両活動ともジャンボタクシー等を用意した。

1.7.1 五サー市

「田舎編」「まち編」のツアー終了後に安芸太田町社協から「五サー市」という祭で学生に何かして盛り上げてほしいとの打診があり、ひろしま留学ツアーのパネル展示と「さんさんネット⁵⁾」のコーナーで地元ボランティアと一緒に喫茶を行った。これに「田舎編」、「まち編」に参加した学生8人（内実行委員2人）が参加した。「田舎編」参加者は住民と再会する機会になった。この時にミニ報告会で作成した資料を配布した。

この活動に当たって実行委員会で議論し安芸太田町での縁を大切に何らかの形で学生が協力する方向に決めた。その協力方法は、ツアー参加者が持ち込み企画を考える事や、県内の学生サークルに呼びかけて活動するなど、数通りの参加パターンが議論された。そして、実行委員会が主体的に関わり、学生の事情を考慮して学生の準備の負担が少ない形で参加する方法を考えた。

1.7.2 廿日市市吉和

2つ目も安芸太田町社協から安芸太田町の障がいのある子どもたちの家族会が廿日市で同じく障がいのある子どもたちの家族会と交流するので、そこに関わらないかとの打診があった。事務局がツアー参加者にそれを呼びかけた。それにツアー参加者がサークルとして応え参加した。内容は両市町の保護者が意見交換している時に子どもたちと触れ合い、その後保護者も加わり全員でゲーム大会を行った。

学生は地域活動をサポートする役割で関わったが、その活動報告をプロジェクトのブログに載せるなど広報活動などにおいても広がりをもたせた。

1.8 小括

事業を通して学生の地域活動の優先順位はバイトや学業などに比べて低い事が分かった。例えば4月から関わっている実行委員の一人が実習や部活などの理由で3つのツアーすべてに参加できなかったと言う事から、そうした中で学生が地域に関わるには幾度も活動の機会を持つ事が必要である。また各大学の行事日程も違い、県内の学生が一斉に集まる事は難しい。例えば実行委員会も全

5) オール広島ささえあいネットを安芸太田町社協ではさんさんネットと呼ぶ。

員出席できる会議日程は設定できず、ツアー参加者が報告会等に数人しか参加しなかった事にも表れている。しかし機会を提供し続ける事によって学生はそれらに参加して、継続的に関わる機会が持てる。学生が主体的に参加したからこそ学生の事情を踏まえた活動になり学生が地域に関わる入口を作れた。これを発展し継続するには大学を含め地域の理解と協力は欠かせないと思われる。

2 事業を通して学生の変化

2.1 ひろしま留学ツアーを通して

ひろしま留学ツアーを通して学生の変化を読み取る。まずツアーアンケートである。このアンケートは参加者全員に配布し回収率は78%であった。次に留学ツアーのグループワークなどから学生の発言をとりあげる。

2.1.1 地域活動参加への意向

学生の地域活動参加の意向の変化について表4をみると、ひろしま留学ツアーを通して地域の現状を感じ取りそこで自分たちのできる地域活動を考えることで、ツアー参加者はこれまで活動したことがない学生が「今後活動したい」、「機会があればしたい」へと意識が変化すると推測される。またツアー参加者の中にはすでにボランティア活動している学生や機会があればしている学生も参加している。そして今後多くの学生が活動参加の意向を示している。ただ「機会があればしたい」との意向が一定数あり、学生自ら積極的に活動していく所までではないと思われる。

表4 ひろしま留学ツアー参加者アンケート

ボランティア活動や地域活動の経験				
	ツアー			
選択肢	田舎編	まち編	島編	計
している	1	2	7	10
機会があればしている	3	6	6	15
したことがない	3	5	7	15
今後地域活動したいか				
	ツアー			
選択肢	田舎編	まち編	島編	計
したい	5	5	11	21
機会があればしたい	2	7	9	18
したくない	0	1	0	1

2.1.2 地域に対してのイメージ

次に表5の「田舎編」の欄から地域に対するイメージの変化が読み取れる。ツアー前の学生の中山間地域のイメージは「山ばかり」「自然が豊か」「何もない」から自然はあるがその他は何もないと捉えていると思われる。そして「さびれている」「衰退している」「暗い」などから元気のない、魅力のない地域として学生は中山間地域を捉えていると思われる。このことは地域を漠然としたイメージとして捉えていたのではないかとと思われる。それがツアー後は「人があたたかい」「元気いっぱい」を感じており、地域のイメージに変化がある。このことは参加した学生の中には普段大学周辺に下宿しており、都市生活において人のつながりが弱い事を示しているかもしれない。しかし記述の中には「でも今回は元気な人が参加してくれていたと思うので、きっとそういう人ばかりじゃ

表5 地域・地域活動に対するイメージ。※「⇒」が参加後の気持ち

質問	記述
<p>「田舎編」 「中山間地域」 のイメージは 変わりましたか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・何もない。 ⇒何もないのではなく、人情であったり、あたたかさがあった。 ・山ばかりで何もないところ。 ⇒意外と住みやすそうだと思います。 ・山ばかりで、あまり魅力がなく、寂しい。 ⇒人口が減少して寂しいもの、魅力もたくさんあり、人もすごくあたたかい。 ・自然が豊かだけど、観光地どまりで人口が増えない。人がない中で様々なPRをしている。 ⇒上のイメージは変わらず、プラスで人が元気なのが印象的だった。 ・さびれている、元気がない。 ⇒元気いっぱい頑張っている。 ・暗くて、疲れたイメージが少し。自然が豊かであるイメージが強い。 ⇒娘さんのようなおばあさんがたくさんいて、社協の職員さんも若い方が担当していて、明るいイメージが強い。 ・正直、もっと暗くてつながりなイメージが強いかなと思ってた。もっと田舎を想像していた。 ⇒仲の良い、つながり、困りごとのシステムに驚いた。でも今回は元気な人が参加してくれていたと思うので、きっとそういう人ばかりじゃないんだろうなとも思った。やっぱり住んでみると分からないことが多い。
<p>「まち編」 「地域活動」 に対するイメージは 変わりましたか</p>	<p>《未知》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(なし) ⇒高齢化を逆写真集として売りにするなどの発想の転換で地域を盛り上げているんだ！と発見しました。 ・あまりよくわからなかった。 ⇒本当に皆さん、街を何とかしたいんだという情熱が伝わりました。 ・あまり知りませんでした。 ⇒行政の方では行き届かない、多様な人々に対するサービスを支えている。人と人のつながりから生まれるあたたかいものである。 ・大雑把なイメージしか持たなくて、正直あまり分かっていなかった。 ⇒良く分かったと思います。感動しました。 <p>《活動に対して》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こういった活動をする事で本当に地域の活性化につながるのがあるのだろうかと考えていた。 ⇒実際に自分たちの考えたアイデアが行政で検討してみるとされて、こういった活動をする事も必要だと感じるようになった。 ・ひたすら働くのだと思った。 ⇒みんなフランクで活動も楽しかった。 ・地域の清掃ボランティアなどが中心であまり種類は多くないと思っていた。 ⇒色々な種類のボランティア活動があり、それぞれの活動が社会を支えていると感じた。 <p>《活動者》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんな気持ちで参加しているのだろうかなど全く想像つかなかった。 ⇒ボランティアの方が生き生きと活動していた。元気になった。 ・隠れたところでたくさんの方が地域活動に参加していると実感した。 ⇒長年住んでいる年輩の方だけでなく、もっと若い方が必要だと感じた。 ・いろんな人とかわるんだらうなという感じ。 ⇒何かしようという熱意を持った人が多い。 ・おじさんおばあさんなど、比較的高齢の人だけでやっている。考え方は堅そう。 ⇒若い人もそれぞれに参加しているし、若い方も必要。 ・ボランティアは若者と中年が多いと思っていた。 ⇒高齢者もボランティアをしていた。 ・尾道大学の学生が関わっている。空き屋再生など、観光協会？ ⇒尾道大学の学生は関わりが深い。尾道大学と社協のつながりが良い。尾道の福祉専門学校生とのつながりを大きくすると良い。高校生の方も活用できたら良い。
<p>「島編」 「地域活動」 に対するイメージは 変わりましたか</p>	<p>《未知》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(なし) ⇒もっとキツイと思っていたが、説明もわかりやすく、地域の人と気さくにはなしをすることができた。地域の人たちが積極的に江田島のことを説明してくれたので、地域の人たちの優しさを知った。 ・(なし) ⇒アットホーム ・(なし) ⇒楽しい！ ・よく知らなかった ⇒地域を活性化する活動 ・よくわからなかった ⇒江田島の現状が思ったより深刻だということが分かった。 <p>《活動に対して》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動 ⇒交流と視点的発見を重視したボランティア活動 ・少し参加するのに勇気がいる ⇒気軽に参加してもいいんだと思った ・かたじけなく ⇒楽しくいろいろ学べる ・参加前も今回のような活動をするのかなと予想していた。 ⇒楽しみながら活動していた。 ・地域が何らかの活動をしているというイメージはありました。 ⇒参加前とそれほど変わってはいませんが、大君の空山会などを見てみると、思ったより活発に活動していると改めて感じました。 ・今までもこのような交流をしたので、楽しいとわかっていました。 <p>《活動者》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人と出会い、そしてやるべきことをやれればいいと思ったのです。 ⇒遊ぶだけでなく、考えることも大事なことだと思います。 ・地域活動は正直あまり何も考えずに参加していると思っていた。 ⇒いろいろ地域ごとの課題を考えるのが大切だと思った。 ・自己満足 ⇒考えることが多い <p>《住民》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・島の人や地域の人を快く迎えてくれると思っていた。 ⇒感謝され、うれしかった。 ・何もない小さな島 ⇒島の皆さんがとても優しくあった。島は大きかった。 ・江田島は2回訪れたことがあって、よいイメージ(空山会はもってこいの場、海がきれい等)しかなかったので、すごく楽しみにしていた。 ⇒よいイメージだけでなく、悪いイメージもつかめたので、江田島を知ってもらおう企画を考えてみたい。 ・正直、お年寄りたちは苦手だった。 ⇒世代関係なく地元を愛する気持ちは同じだった。 ・高齢化といっても少し大変なぐらいだろうと思っていた。 ⇒ひどく深刻な問題であるというリアルに感じた。

ないんだろうなとも思った。やっぱり住んでみないと分からないことが多い」「意外と住みやすそうだ」から学生は地域住民のあたたかさの裏にある地域問題を感じたり、地域に住む事を想像してみたりしており、地域住民を通して学生自身がそこで暮らすことをイメージし、地域を捉えていると思われる。さらに同じく表5の「島編」の欄をみると、「世代関係なく地元を愛する気持ちは同じだった」「(高齢化) ひどく深刻な問題であるとリアルに感じた」など地域住民の気持ちや地域の事情を理解しようとしている事が伺える。

2.1.3 地域活動に対するイメージ

次に地域活動に対するイメージであるが、表5の「まち編」「島編」の欄をみると1点目は、ツアー前の記述は無回答や「よく分からなかった」と書いており学生は地域活動のイメージを持っていない事が分かる。ツアー後「街を何とかしたいんだなという情熱がわかりました」「感動しました」「アットホーム」「楽しい」など学生の気持ちに変化している。2点目は活動に対して、「かたい」「参加するのに少し勇気がある」「ひたすら働くもの」「清掃活動が中心」などから地域活動分野が限定されおり、参加するにはハードルがあると感じている。ツアー後「気軽に参加できる」「楽しい」「こういった活動も必要」「それぞれの活動が社会を支えている」など認識しており、学生は地域の実情や地域活動の重要性を認識し、そこに必要な活動があると感じていると思われる。3点目は活動者について、ツアー前は「いろんな人が関わるんだろうな」「比較的高齢の人がやっているだけ」「若者と中年が多い」などから、ツアー後は「もっと若い力が必要だと感じた」「高齢者もボランティアしていた」などをあげており、幅広い層が地域活動の担い手であり、若い世代も必要とされると気持ちに変化していると思われる。また活動者が「自己満足」「地域活動は正直あまり何も考えずに参加している」など活動したい人が自己満足で行う地域活動との見方が地域の事を考えた活動であり、学生自身が考える事も大切と変化している。

2.1.4 グループワークでの学生の発言

学生の意識の変化はツアーのグループワークの発言からも読み取れる。例えば「家族でも頼めない関係」「近いからそこ頼みづらい」など人間関係について難しい部分も出された。これらは住民と直接話さないと分からない部分ではないか。さらに地域住民に対して「人が温かい」「人との交流」「やさしい」など人柄や人間関係の良さを多くあげている。また学生は普段の学生生活では感じられない棚田の風景など物珍しい景観も新鮮だったようである。例えば「坂の上からの景色がキレイ」「トトロ、もののけの姫の世界」「古い家屋や路地・坂道など趣がある町」「棚田がキレイ」「海がきれい」など住民にとっては当たり前のことかもしれないが、学生にとっては評価できる地域の環境などあげられている。それは、そこに住んでいるから出される意見というよりは、住民によって管理、維持された地域を外から見る事によって捉えられていると思われる。

このことは「田舎編」で環境保護の取り組みをきいた学生の反応からも読み取れる。環境保護に取り組んでいる人は熊の保護をめぐって、地域住民にとっては、畑の作物を荒らしたり住民を襲ったりする熊であるが、一方で熊を殺すことに対して、動物愛護や自然保護の視点からその行為に否定的な意見があるといった2つの立場を紹介された。1日目の夜ふりかえりの時に、その取り組みの感想が参加者から多く出された。参加者にとってはインパクトのあることだったし、これまで地域住民のことまで考えて環境保護を考えたことはなかったのではないと思われる。

2.2 パネリストの学生発言

学生の意識の変化はミニ報告会と活動報告会のパネリストの発言からも読み取ることができる。ここではミニ報告会に関しては留学ツアーに絞った発言と活動報告会は地域活動・ボランティア活動など幅広く捉える中での発言を踏まえて学生パネリストの意識の変化を述べる。

2.2.1 ミニ報告会パネリスト学生発言

表6をみるとミニ報告会での発言から地域に対して「暗い」「元気がない」「寂れているかな」などのイメージから「元気にびっくり」「店が少なく、買い物など課題がある」「坂が健康につながる」など地域を実際に見る事で新たな発見が読み取れる。そして地域に出ていき、地域の実情、その地域を知ることの大切さを指摘している。また地域が自分の身近なものとして捉えて自分と地域との関わりを考えている。これから地域やボランティアに関わって行きたいとの希望がある。この発言はツアーアンケートの記述より一歩踏み込んだ学生と地域の関係や地域活動についての見方であると思われる。なぜならばミニ報告会のパネリストはツアー前から放課後子ども教室推進事業⁶⁾に関わるボランティアサークルメンバーである a さん、プロジェクト実行委員でもある c さんの発言で

表6 ミニ報告パネリスト学生発言

	地域のイメージは	ツアーを通して自分自身にどんな変化があったか	今回学んだことをどのように活かすか	今後ボランティア活動地域活動への関わりは
a さん 大学4年生 県外出身 女 実行委員の誘いで田舎編参加	安芸太田町に行った事がなかったので特にイメージを持っていない。農村地域とか中山間地域いうことを聞いて暗いとか元気がないというイメージ。 ⇒地域のおばちゃんとお飯を食べてみるとすごく元気でこちらが元気をもらおうという感じで、その元気にびっくり	地域活性化という言葉に対して真剣に考えるようになった。一度行くだけでは地域の活性化はできないし、継続していくことが大事。一度いっ所をみただけでは地域の問題点はなかなかつかめないと思うので長い期間滞在するなどそういったことが大切だ。本当に活性化したいのだったらその地域に住むことが大切なのではないか。しかしよそ者だからこそわかる地域の魅力というものもあるので、よそ者を加入しつつそれをいかに継続していくということが重要	地域に出ていく大切さを実感しました。中山間地域とか農村とかいいまでも、やはり一括りにはできなくて、それぞれの地域が抱える問題というのは多様であって違うと思います。イメージで決めるつけるのではなく、実際に行ってみて地域の人たちの声などに耳を傾ける。これから仕事に携わっていく際そうしたことを大切にしたいと考えました。	公務員になるのですが、その中で地域活性化というのはすごく大事だと思っていますので、こういう活動の経験を活かして仕事をしていきたいと思っています
b さん 大学4年生 県内島出身 男 実行委員の誘いで田舎編参加。五ヶ市参加。下半期実行委員	寂れているかなというイメージ。 ⇒まちが少し寂れていても人と人のつながりが強いというか深いというか、近所づきたいかいんだと言うイメージ。お店が少なく、ときどき可部のあたりまで行って買い物などをするという課題があると聞いた	将来どこに永住するかということを考えました。自分が将来家庭を持つことになった時に、地域的には住みにくいかもしれないんですが、実際には人と人のつながりなどで住みやすいサポートもしてくれる、自分に負担にならない、そういう所に住みたいと思いました。	コミュニケーション力がついたと思います。見ず知らずの人と話して人間関係を作っていくというのは社会に出ていくうえでもとても大事なことだと思います。	単純に関わっていきたい。自分を成長させることができ、新しい価値観を見出すことができました。
c さん 院生2年 県内広島市郊外 男 まち編参加 4月から実行委員 島編では卒業を控えサポート役	バリアフリーが必要だと授業でもよく出ており住みやすいようにするにはそういういった平坦な場所がいっのかと思っていた。 ⇒坂を毎日のように歩くことで足腰が健康になる。坂道はつらいだけではなく、一方で健康のメリットもある。	地域住民の声をいうのはすごく重要だと感じました。地域の人がどれほど強い思いを持っているか、テレビのニュースなどでは伝わらないようなことを実際に地域の人から声を聞くということが大切だと思います。	ハウスメーカーに就職するが、家売るというだけではなく、その地域にどういった活動があるのか、どういったことがその人たちの生活に役に立つのか、そういったことも視野に入れて考えたいと思います。そのため、地域を知ることが重要だと思うように考えが変わりました。	県外に就職するので、すぐにボランティア活動するのは難しいかと思っていますがやりたいたいという気持ちは強く持っています。

6) 地域住民等の参画を得ながら、学習活動やスポーツ・文化芸術活動、地域住民との交流活動の機会を提供する取組を推進し、子どもたちの健全育成を図ることを目的としている。放課後子ども教室の活動内容の充実、活性化を図ること、また、近年求められている大学生の社会貢献活動への参加の支援を目的として広島県教育委員会が大学生のボランティアチームの派遣を行っている。(http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/center/center-model-wakuwaku-wakuwaku-top.html)

あり、既に地域活動やボランティア活動に関わっている学生だからだと思われる。

2.2.2 活動報告会パネリストの学生発言

ミニ報告会のパネリストが地域にこれからも関わりたいとの希望があったが、同様に表7の活動報告会のパネリストも「自分の地域をなんとかしたい」「自分に何かできないかと思うようになる」と発言がある。また「私も何かを返したい」からもう一度地域に関わる意識や「今日は雪が降っているけど大丈夫だろうか」から関わった地域を気にかける意識が読み取れる。このように地域に関わる機会を持つことで意識に変化が生まれている。

表7 活動報告会パネリスト学生発言

	今まで地域活動に対してどんなイメージ	ツアーを通して、安芸太田町で	なぜ五サー市に参加したのか	地域活動のイメージや自分自身に何か変化はあるか
dさん 大学2年生 県外出身 女 田舎編、まち編参加。 ツアー後 尾道100km 徒歩の旅学 生スタッフ として参加	地域の人たちが川の掃除などを行っているなど そういうことしか考えて いませんでした。 活動をする集まり・組織 のようなものがあって ではこの日にこれこれ しますというようなイ メージ	自分の地域が大好き で地域を盛りあげよ うと活動を行っている 人を見て、私は島根 県出身なのですが島 根に対する地元愛と いうのを思い出して 島根を何とかしたい という気持ちになり ました。	自分たちは行って知識 やおいしい食べ物など をいただいただけで、何 も地域の人たちに返せ てないのではないかと いうことを思い、1度行 っただけではなく、私も 何かを返したと参加し た。	地域ってなんだろうと考えた時に、今までは自分が住んでいる場所 が地域と思っていたのですが、地域と言うのは自分と関わりのある 場所なんだというように変わって安芸太田町も2回行かせてもら って自分の地域のようにとらえることができるようになったこと が大きな変化だと思います。地域が自分と関わりのある場所と考 える事ができるようになったことで行った地域の人たちに対して今 日は雪が降っているけど、大丈夫だろうかなど気にかまけたりするよ うになりました。自分の住んでいる地域を何とかしたい、活性化し たいなど自分に何かできないかと思うようになりました。

2.3 小括

ツアー参加者のツアー後の動きについて述べる。「島編」と活動報告会に参加した学生から活動報告会から半年ぐらいたって実行委員会にメールが届いた。その内容は「地域の実情や地域のニーズを地域から聞き、それに即したイベントを学生が提案し、地域と共同で企画運営し、それをやがて地域住民の手で運営できるように支援する」という提案であった。また「まち編」、五サー市、活動報告会に参加した学生は2012年4月から実行委員になり「留学ツアーに不安な気持ちの中で申し込んだが一步踏み出した事で実行委員として活動できている」などと述べている。このように学生は急には意識の変化はなく、地域に主体的に関わる経験を通して自分と地域との関わり方を模索していると思われる。あるいは他の実行委員にツアー参加者が「就職のエントリーシートのために参加したけど地域活動も良いものだ」と話したそうだ。

報告会パネリストのaさん、bさん、dさんはミニ報告会や活動報告会ののちに実行委員会に参加し、広報面などで事業に協力した学生である。特にbさんは「島編」では実行委員会の中核メンバーになり事前の地域との打合せやグループワークの進行役など実行委員会に積極的に関わった。さらに卒業論文は「田舎編」のフィールドワークで保護者の子育て支援活動を間近で見て、自身の専攻を活かして、地方自治体の子育てに関する財政支援を研究したそうだ。

このように学生はそれぞれの関わり方を考え、より発展した活動をしていこうとしている。加えて学生は取り組みを報告する必要がある。活動をやりっぱなしでなく、学生は地域で何を感じたのかを報告会や報告書のような形で地域に還元する。その事は地域に対して一度きりの関わりでないことを意味しているからである。このことは「島編」と活動報告会に参加した学生のメールから読み取れるので学生の意識の部分にも伝わっておりこの事業はその点は評価できるとと思われる。

3 まとめ

3.1 学生と地域がつながる

この事業を通して、学生が地域に関わるきっかけを作ることで、学生は地域の事情を考え、地域活動に対する視野が広がっていると思われる。そしてすべての学生が劇的、急速に考えが変わることはないと思われる。しかし、多くの学生がツアーアンケートで今後地域活動の意向を「したい」「機会があればしたい」と示しているように学生は地域活動に関わりとしていると思われる。

その中の数人の学生は学生の事情を考えると活動を継続する事が難しい面もあるが、継続的に地域に関わる事によって地域社会では若者層が少なくても、地域の担い手になる可能性があるということが分かった。つまり、あまり地域の問題を意識しないで友達同士で気軽に地域活動に参加した学生の意識が地域活動を知り、活動者と対話し、短時間でも一緒に活動することで地域に継続的に関わることの重要性に気づき、地域活動を自分の事として考えられるように変化したと思われる。そして長期的には地域で行われるボランティア活動に参加するなどによって継続的に地域に関わる事でき、地域の担い手が増えていく兆しが見える。学生と地域の関係性として主体的に関わる→継続する展開が見られる。

3.2 学生が継続的に地域に関わるために

このような継続的な取り組みにしてきた事で、学生がプロジェクト実行委員会に加わることや地域でボランティア活動するなど学生がより主体的な関わりができています。

地域住民と学生の関係はこれまでは、学生の地域活動と言えば、学生は地域を活動するフィールドとして捉えた所で活動していたのではないかとと思われる。それは端的に言えば、企画を持ち込む形で自分たちの興味関心があることを地域で行うという事である。つまり地域の事情はお構いなしで、地域との調整は置き去りとまでは言わないがあまり意識しないということである。一方で地域住民も学生の気持ちを聞いてからではなく、自分たちのやり方に学生を引き込んでいたのではないかと。そうではなく、活動報告会でぬくぬくネットワーク安芸太田会長が「忙しい中で活動している学生の状況を理解し一緒に活動する仲間として全員にメリットがある雰囲気づくりや体制を整えなければいけない」との発言あるように、互いにそれぞれの条件や立場を理解しながら地域で必要な地域活動をしていく姿勢が重要である。

これを一度関わった学生がまず地域活動していき、それを蓄積する中で新しいメンバーが加わっていくような進化が求められていると思われる。そして、共に考え共に行い共にふりかえるプロセスを設ける。つまり企画の計画、実施、総括を通して地域を良くしていく目標を何度も共有しながら活動していく。これは長期的な視点ではあるが、学生も世代交代してくことを考えれば、幾度も関わる機会を提供する中で「できる時にできる形で」関わる方が、地域に関わっていかうとする意識や継続的な活動基盤が作られていくのではないかとと思われる。

おわりに

この事業を行うために実行委員会は16回開かれ、関係者との打合せやプログラムの実施を含めると1年間に30回以上活動が行われた。こうした地道に実行委員が集まり事業に関わる中で活動が積

み重ねられた。その労力は計り知れない。4月に集まった実行委員はこの事業を進める責任を持ち、事業を進めながら学生を巻き込んでいく重要性を認識していた。誰かが引っ張るのではなく、実行委員会のメンバー間には対等な関係で、互いを補いながら事業は進められた。

短期的には成果は見えにくく時間もかかるし学生の主体的な地域活動は急速に発展していかない。可能な限り学生が主体的に取り組んでいく事が望ましいが、在学期間に限られるなどの条件を考えると、サポート役の存在が必要である。それは地域、社協、実行委員 OB・OG などの社会人ではないか。地域住人はなかなか成果の見えない学生の取り組みを長期的な視点で受け止める事も必要であり、社協は事務的に事業を進めることであり、経験を踏まえて OB・OG が学生が継続的に地域に関わる場を作り続ける事をサポートする事が求められる。

【参考文献】

- 国分厚, 斎尾直子, 2008, 「農山村エリアに展開する『やまなかキャンパス』を契機とした地域の人材形成」 小林英嗣 + 地域・大学連携まちづくり研究会編『地域と大学の共創まちづくり』学芸出版社, 123-127.
- 渡会清治, 2008, 「学生まちづくりの動向と展望」 小林英嗣 + 地域・大学連携まちづくり研究会編『地域と大学の共創まちづくり』学芸出版社, 128-132.
- 筒井のり子, 1997, 「ボランティアの歩み——私たちの社会とボランティア」 巡静一・早瀬昇編『基礎から学ぶボランティアの理論と実際』中央法規出版, 20-34.
- 名倉亨, 1997, 「ボランティア活動を始めるにあたって」 巡静一・早瀬昇編『基礎から学ぶボランティアの理論と実際』中央法規出版, 140-155.
- 伊藤真知子, 2007, 「地域の課題と大学まちづくり——交流から共創へ」 伊藤真知子・大歳恒彦・小松隆二編『大学地域論のフロンティア』論創社, 41-63.
- 石川敬香, 2007, 「まちを音楽解放区に」 伊藤真知子・大歳恒彦・小松隆二編『大学地域論のフロンティア』論創社, 251-281.
- 濱田康行, 2007, 「産学連携少史」 濱田康行編『地域再生と大学』中央公論社, 57-86.
- 稲葉一洋, 2007, 『地域福祉の発展と構造』学文社.
- 田尾雅夫, 2001, 『ボランティアを支える思想』アルヒーフ.
- 岡本榮一, 2006, 「ボランティア=自ら選択するもう一つの生き方」 岡本榮一・菅井直也・妻鹿ふみ子編『学生のためのボランティア論』大阪ボランティア協会, 6-21.
- 久隆浩, 2006, 「新たな自治の創造」 岡本榮一・菅井直也・妻鹿ふみ子編『学生のためのボランティア論』大阪ボランティア協会, 116-127.
- 林良博・高橋弘・生源寺眞一, 2005, 『ふるさと資源の再発見』家の光協会.
- 大西隆・小田切徳美・中村良平・安島博幸・藤山浩, 2011, 『これで納得! 集落再生—限界集落—のゆくへ』ぎょうせい.
- 若林幹夫, 2007, 『郊外の社会学』筑摩書房.

- 特定非営利活動法人日本ボランティアコーディネーター協会編, 2011, 『ボランティアコーディネーター白書2010-2012年版』大阪ボランティア協会
- 国光ゆかり・関司直也, 2011, 「農山村と若者を結ぶ『かけ橋』組織」『農山村再生・若者白書2011』編集委員会編『緑のふるさと協力隊 響き合う! 集落と若者 農山村再生・若者白書2011』農山漁村文化協会, 90-107.
- 宮口侗廸・木下勇・佐久間康富・筒井一伸編, 2010, 『若者と地域をつくる——地域づくりインターンに学ぶ学生と農山村の協働』原書房.
- 農林水産省, 2010, 『平成22年版 食料・農業・農村白書』佐伯印刷株式会社
- 全国社会福祉協議会・全国ボランティア・市民活動振興センター, 2011, 『学生パワーで地域を元気に』
- 広島県民ボランティア活動推進会議, 2012, 『平成23年度学生と地域をつなげる絆づくり事業 学生の地域活動応援プロジェクト 活動報告書』

Study of student's local view

Hironori OGAWA

I have been interested in the rural view of urban residents.

Now, I especially paid attention to urban students. Because there are few young people in the area, but I think the students are able to join and help local people's action.

In this article, I took a helping project of the student's local action. Through the project, some students changed their consciousness and rural view clearly. Students must talk and act with local people together, then, they can make independent activity.

It's necessary for both students and local people, to understand each other. And the support of the local group e.g. "Shakai fukushi Kyogikai" or senior of the project.

**Students's local activity. Independent activities. Local action. Support of local residents.
Change of a local view**